七尾山近くに建つ益田兼堯の銅像。雪舟とも交友した武将

より道紀行

時代が変わる節目の度、発揮された先見の明。乱世を勝ち抜いた益田氏

文：網野ゆかり

データロジックがある山口県萩市田万川地域の東隣、島根県益田市。
中世、石見国（現在の島根県西部）西部で最大の国人領主・益田氏の城下町でした。
益田氏は江戸時代、現在の萩市須佐へ移り、萩藩の永代家老に。
そして現在も続く益田家には１万９千点余りもの全国トップクラスの古文書が残されました。
時代が変わる中、先見の明で生き抜いた益田氏を紹介しましょう。

益田市中心部の東、七尾山の全山にわたって築かれた「七尾城」跡。その山城から川を隔てた北側には、国人領主の居館跡「三宅御土居」。山城と居館の遺構が共に良好な状態で残る益田は、全国的にも貴重な今も中世が息づく城下町です。

西石見最大の国人領主だった益田氏には、多くの謎があります。しかし、近年、研究が進み、益田氏への注目が高まりつつあります。

益田氏は本姓を藤原氏といい、石見国における歴史は平安時代終わりごろ、現在の浜田市にあった石見国衙（こくが）に国司として着任した藤原国兼（くにかね）に始まると考えられています。

その後、源平合戦のとき、西国の国人領主の多くは平氏に味方した中、国兼のひ孫・兼高（かねたか）は源氏方に付きます。それによって益田氏は鎌倉時代、源氏から石見国の武士のリーダーとして現在の益田市・浜田市を中心に多くの領地を認められることになりました。

益田、三隅、周布…。一族の惣領家は誰？

その後、一族は「御神本（みかもと）」を称し、益田氏・三隅氏・福屋氏・周布氏・永安氏などに分かれていきます。その中で一族の惣領家は何氏なのか。確かなことは分かっていません。中でも益田氏と三隅氏は互いに惣領家を主張し、戦いを繰り返します。

しかし、戦国時代の１５６０年代にはその勢力が衰えて嫡流が断絶。そのことが御神本一族の惣領家の解明を一層難しくしてしまいました。

発展の礎を築いた兼見

益田氏歴代で発展の礎を築いたのは、南北朝時代の益田兼見（かねみ）でした。

北朝（足利政権）と南朝（後醍醐天皇など）とに分かれて戦った南北朝時代。一族の中でも益田兼見は北朝方、三隅氏は南朝方に付きました。

北朝方と南朝方との戦いは、石見国や長門国の現在の萩市田万川地域の小川、須佐地域の弥富、山口市阿東地域なども戦場にして行われました。そうした中、益田兼見は山口を本拠地とした有力な守護大名・大内氏と結び、三隅氏ら南朝方との戦いに功を挙げ、ほぼ現在の益田市域の支配を確立します。

また、兼見は今も益田を代表する寺院「萬福寺」を創建し、「医光寺」などの寺社を保護。その２つの寺には「雪舟庭」と伝わる美しい庭園があります。伝承の背景には、兼見の４代あとの当主兼堯と、大内氏を頼って山口へやってきた画僧・雪舟とが親しかったことがあります。益田氏歴代は武人であるだけでなく、教養豊かな当主でもあったのです。

医光寺庭園（国指定文化財）。雪舟作と伝わる

医光寺総門（島根県指定文化財）。かつての七尾城の大手門で同地へ移築された

萬福寺本堂（国指定重要文化財）。益田氏の菩提寺。第二次長州戦争石州口の戦いの際の弾痕が本堂の柱に残る

応仁・文明の乱。大内氏重臣・陶氏と結び、萩の一部へ勢力拡大

益田氏と萩との関係は江戸時代からと思われがちですが、室町時代、貞兼のときから大内氏のもとで萩の一部を治めるようになります。そのきっかけは応仁元（１４６７）年に始まった「応仁・文明の乱」です。このとき大内政弘は大軍を率いて上洛し、西軍の主力となって戦います。

ところが政弘の上洛後、国元で、おじの大内道頓が東軍として挙兵します。道頓には、大内氏重臣や益田氏のライバル三隅氏や津和野の吉見氏も呼応しました。

大内氏重臣の陶氏も当初は大内道頓方でした。しかし、途中で大内政弘方へ。益田兼堯は陶氏と婚姻関係にあったことなどから陶氏に味方し、大内道頓を敗走させます。兼堯は大内政弘からこの働きが認められ、現在の萩市河島新方・河島本方、大井浦等を預けられることになったのです。

大内方、それとも毛利方か。命運を賭けた藤兼の選択

大内氏が将軍権力と結び付いて西国一の大名となる中、傘下の益田氏も石見国の中で存在感を高めていきます。

やがて戦国時代を迎え、状況が変わり始めます。天文20（１５５１）年、西国一の栄華を誇った大内義隆が、陶隆房（晴賢）や毛利元就らによるクーデター で自害。そのとき石見の国人らを束ねてクーデターを支えたのが益田藤兼でした。

益田兼見の墓（伝）。萬福寺境内の椎山墓地にある

クーデター後、藤兼は大内氏の新当主から現在の萩市田万川地域の田万郷や小川郷の一部を与えられ、大内氏滅亡後には海外交易の拠点だった萩の離島・見島も得て勢力を広げ、財も築きます。

ところが陶晴賢と毛利元就が対立し、弘治元（１５５５）年「厳島の合戦」で陶氏が毛利氏に敗れ、戦死します。益田氏は大きな後ろ盾・陶氏を失い、このまま大内方に残るのか、それとも毛利方に付くのか―。藤兼は生き残りを賭けた選択を迫られ、遂に毛利氏との和睦へ動きます。

その直後、二百年にわたって栄えた大内氏は毛利氏により滅亡。藤兼は永禄６（１５６３）年、毛利氏と正式に和睦し、その傘下へ入りました。

家康からの誘いを断り、萩藩の永代家老へ

毛利元就が中国地方の雄へと駆け上る中、藤兼の子・元祥は元就の子・吉川元春の娘と結婚して絆を強めます。

しかし、慶長５（１６００）年「関ヶ原の合戦」で、石田三成らの西軍が徳川家康らの東軍に敗退。西軍の総大将だった毛利氏は、家康から領地を大きく削減され、防長２カ国（現在の山口県）のみに押し込められます。

このとき益田元祥は家康から大名にすると誘われます。しかし、元祥は誘いを断り、毛利氏を選択します。そして毛利氏の萩移住に伴い、元祥は先祖伝来の本拠地・益田を離れ、須佐へ移ります。その後、元祥は萩藩永代家老の座を得、益田氏は江戸時代を生き抜くことになりました。

源氏、足利氏、大内氏、毛利氏…。時代が移る中、その重大な節目の選択によって乱世を生き延び続けた益田氏。地方にあって広い視野で時代を見極める目を持ち、トップを支えるかけがえのない位置にあり続けた、智将の家だったといえるかもしれません。

染羽天石勝神社拝殿の屋根に掲げられた益田氏の家紋